

アリストテレース『分析論後書』最終章に ある敗走の比喩は何を意味するか

松 尾 大

アリストテレース『分析論後書』最終章、即ち第2巻第19章は、加藤信朗 (p.832) が「本書の掉尾を飾るにまことに相応しい一章である」と評した如く、力のこもった部分ではあるが、他方又、その主題の本性の故からか、現存する Corpus Aristotelicum 中でも最も多くの議論を呼んできた箇所の一つでもある。本論文の目的は、この章に含まれる一つの比喩が何を表わすか、リチャーズの用語を借りれば、「趣意」(tenor) は何か、という問題に、一つの新たな解答を与えることである。

先ず、比喩とその前後の部分 (100 a 3-b 5 尚、アリストテレースに於ける典拠は、書名を省略し、ベッカー版の頁、欄、行のみによって示す。以下同じ) の原文とその日本語訳とを挙げる。

Ἐκ μὲν οὖν αἰσθήσεως γίνεται μνήμη, ὥσπερ λέγομεν, ἐκ δὲ μνήμης πολλάκις τοῦ αὐτοῦ γινομένης ἐμπειρία· αἱ γὰρ πολλαὶ μνήμαι τῷ ἀριθμῷ ἐμπειρία μία ἐστίν. ἐκ δ' ἐμπειρίας ἢ ἐκ παντὸς ἡρεμήσαντος τοῦ καθόλου ἐν τῇ ψυχῇ, τοῦ ἐνὸς παρὰ τὰ πολλά, ὃ ἂν ἐν ἅπασιν ἐν ἐνῇ ἐκείνοις τὸ αὐτό, τέχνης ἀρχὴ καὶ ἐπιστήμης, ἂν μὲν περὶ γένεσιν, τέχνης, ἂν δὲ περὶ τὸ ὄν, ἐπιστήμης. οὕτε δὴ ἐνυπάρχουσιν ἀφωρισμένοι αἱ ἕξεις, οὐτ' ἀπ' ἄλλων ἕξεων γίνονται γνωστικώτερον, ἀλλ' ἀπὸ αἰσθήσεως, οἷον ἐν μάχῃ τροπῆς γενομένης ἐνὸς στάντος ἕτερος ἔστη, εἴθ' ἕτερος, ἕως ἐπὶ ἀρχὴν ἦλθεν. ἢ δὲ ψυχὴ ὑπάρχει τοιαύτη οὐσα οἷα δύνασθαι πάσχειν τοῦτο. ὃ δ' ἐλέχθη μὲν πάσαι, οὐ σαφῶς δὲ ἐλέχθη, πάλιν

εἰπωμεν. στάντος γὰρ τῶν ἀδιαφόρων ἑνός, πρῶτον μὲν ἐν τῇ ψυχῇ
καθόλου (καὶ γὰρ αἰσθάνεται μὲν τὸ καθ' ἕκαστον, ἡ δ' αἰσθησις τοῦ
καθόλου ἐστίν, οἷον ἀνθρώπου, ἀλλ' οὐ Καλλίου ἀνθρώπου)· πάλιν
ἐν τούτοις ἴσεται, ἕως ἂν τὰ ἀμερῇ στή καὶ τὰ καθόλου, οἷον
τοιονδὶ ζῶον, ἕως ζῶον, καὶ ἐν τούτῳ ὡσαύτως. δῆλον δὲ ὅτι ἡμῖν
τὰ πρῶτα ἐπαγωγῇ γνωρίζειν ἀναγκαῖον· καὶ γὰρ ἡ αἰσθησις οὕτω
τὸ καθόλου ἐμποιεῖ.

「かくして感覚から所謂記憶が生じ、同一のものの記憶がしばしば
繰り返されると、そこから経験が生ずる。なぜなら、数の点で多くの
の記憶が一つの経験であるから。扱て、経験、又は魂に安らぐ普遍
全体、多の脇にある一（これは、それら全てに、同一なる一つのものと
して内在する）から、技術と学の出発点が生ずる。生成に関しては
技術の、存在するものに関しては学の出発点が。従って、限定され
た持前が始めから内在しているのでもないし、又、ものを一層よく
知っている別の持前から生ずるのでもなく、感覚から生ずる。丁
度、戦闘に於いて敗走が生じたとき、一人がとまると、もう一人が
とまり、次いでまたもう一人がとまり、こうして始まりにまで至る
ようなものである。扱て魂は、それを受ける能力があるようなあり
方をしているものである。今語られたことは、明瞭には語られてい
なかったの、もう一度述べよう。つまり、差別を持たぬもののう
ちの一つが停留すると、最初の普遍が魂に生ずる（なぜなら、個別的
なものをひとは感覚するが、感覚は普遍的なものに関わるから。例えば、
人間たるカリアスでなく、人間に関わる）。それらに於いて再び停止が
生じ、分けられえないものと普遍とがついにはとまるであろう。例
えば『このような動物』が生じ、ついには『動物』が生ずる。そし
てこの『動物』に於いても同様である。従って、最初のこともを
帰納によって知るのが、われわれにとって必然的であることは明ら
かである。なぜなら、感覚はそうにして普遍を導入するから。」

問題の比喩は、この部分のほぼ中央（100 a 12-13）にある。テミステイ
オス、ピロポノスらの古註から現代に至るまでの従来の全ての見解によ

れば、この比喩の指示しているのは、感覚的、個別的印象の刻印が多数集積することによって καθόλου (普遍乃至法則) が把握乃至認知される過程である¹⁾。ここで用語を規定しておこう。アリストテレースは καθόλου の語を、時に単独の項 (ὅρος) としての普遍の意味で用いている。これは思考形式としては概念に対応する。彼はそれを時に項連関 (διάστημα) としての法則の意味でも用いている。これは命題に対応する²⁾。上の解釈に含まれる καθόλου の語は、この両者の意味を含めて (又は両者の区別が非関与的である領域について) 使われているものとする。

この解釈によれば、個別的感覚の集積は一方向的、不可逆的加算の状態に於いて行なわれる。しかしこれは、普遍の把握の説明としてはあまりよいものではない³⁾。カントの指摘の如く、普遍概念の形成、即ち多くのものからそれらに共通する要素を読みとることは、決して個別の一方向的加算のみによるのではなく、むしろその活動の中心的成分は、多くのものの間の視線の往還である。つまり、類似したもの同士の比較対照は、類似性の直観によって始動し、あとのものが前のものの光のもとで見られたり、前のものがあとのものを通して見られるなど、複雑な照らし合い (reflexio) を介して進行する。このことは普遍としての καθόλου の把握のみならず、法則としての καθόλου の把握についても妥当する。従って、単純な不可逆的加算、集積のモデルは、καθόλου 把握の過程をあまりうまく照明することにはならない。

かかる難点を持つ従来の解釈に対し、われわれは、この比喩が、最下位の普遍から中間レベルの普遍を順次一つずつ辿ることによって最高位の普遍に至る段階的上昇過程、及びその結果として原理を把握することを意味しているものと解する。このように普遍に高低の段階があり、低次のものから高次のものへ順を追って移行する過程については、『分析論後書』の先行する部分に於いて、例えば定義に即しては 97 b 7-39 で、中項探求に即しては 85 b 27-86 a 3 で語られている⁴⁾。一つの普遍の把握に至る過程と異なり、このような各段階の普遍の漸進的明瞭化乃至析出の過程に於いては、一つ若しくはいくつかの段階を飛越することは起こりうるかもしれないが、決して逆行は生じえない。なぜなら、ひとが同一律のもとに思索する限り、一旦或る段階の普遍を知った状態は、

の定義からして (per definitionem) その後も確保、把持され続けるからである。以下、この解釈を支える 3 つの論証を提示する。

I

第1の論証は、最終章全体との連関からのものである。これは更に、主題からのものと用語法からのものの2つに分かれる。

先ず主題からの論証であるが、最終章の主題はこの章の冒頭で明確に規定されている。

Περὶ μὲν οὖν συλλογισμοῦ καὶ ἀποδείξεως, τί τε ἑκάτερον ἐστὶ καὶ πῶς γίνεται, φανερόν, ἅμα δὲ καὶ περὶ ἐπιστήμης ἀποδεικτικῆς ταῦτόν γὰρ ἐστίν. περὶ δὲ τῶν ἀρχῶν, πῶς τε γίνονται γνῶριμοὶ καὶ τίς ἡ γνωρίζουσα ἔξις, ἐντεῦθεν ἔσται δῆλον προαπορήσασιν πρῶτον.

「推論と論証とについて、それぞれが何であり、いかに生ずるかは明らかである。同時に又、論証的学についても明らかである。両者は同一のものであるから。他方、原理について、それらがいかにして知られたものになるか、及びそれを知る持前は何かは、探求の前段階を成す諸アポリアを考察するとき明らかとなろう。」(99 b 15-19)

この箇所では明らかなことは、最終章の主題が原理把握であって、単なる普遍の把握ではないということである。従って、このあと解明されるべきは、一つの普遍がいかにして知られたものになるかではなく、かえって一つの原理がいかにして知られたものになるかである。かかる文脈に一つの比喩が置かれるとき、それは、普遍の把握を説明するものとして読まれるよりも、原理の把握を説明するものとして読まれる方が、一層その関与性を増す。

次に用語法からの証明であるが、一般に或る用語を意味の一貫性を以て使う方が、そうでない場合よりも学理的言論に於いては望ましいことは論理的要請であるが、その解釈学的投影として、或る用語を一貫してとる解釈の方が、そうでない解釈よりも、他の諸条件が等しければ、すぐれているということを公準として立てることがここで許されるならば、比喩に含まれていて、同時にこの章の他の部分にも用いられている重要

な語は、同一の意味にとられる方が望ましいことになる。

問題の語は ἀρχή である。一般にはこの語は多義的であるが⁵⁾、最終章の比喩以外の部分に於ける用例 (99 b 17, 21, 100 a 8, b 9, 10, 12, 13, 15, 16) に於いては、いずれも一義的に〈原理〉を意味している。ところで、比喩の中に現われる ἀρχή の語は、比喩内部との関係という第1の水準に於いて読まれるならば、〈戦陣が崩れる以前の秩序〉又は〈最初に逃走した者〉と解されるが⁶⁾、比喩の外部との関係という第2の水準に於いては、〈普遍〉に相当すると解するよりも、〈原理〉を意味すると解する方が、術語としての一貫性が生じうる。然るに、100 a 13の ἕως ἐπὶ ἀρχὴν ἦλθεν が第2水準では〈原理にまで至る〉と読まれるならば、それに至る ἐνὸς σπάντος ἑτερος ἔστιν, εἰδ' ἑτερος も、原理にまで至る過程全体の記述ととる方がより整合的であろう。

II

第2の論証は、比喩に後続する部分 (100 a 15- b 5) との連関からのものである。

本題に入る前に予備的手続きとして、その部分の主題が普遍把握ではなく原理把握であることを確認しておく必要があろう。そのことは、最終章全体が原理把握を主題に持つ以上、それとの意味方位の一致ということからして既に要請されていることではあるが、この部分のうち100 b 3-4の一文に於いてこそ、主題が普遍の把握でなく原理の把握であることが既にその顕在的レベルで読み取ることができるのに対して、他の部分 (100 a 15- b 3, b 4-5) では、外見上は原理把握でなく普遍把握について語られているように見えるからである。つまりそこでは、把握という活動の対象乃至内容が、例えば「動物」の如く単項の形で語られているため、何故それが項連関たる原理の把握となるのか、という問題がしばしば提起されてきたのも無理もないことである⁷⁾。しかしこの問題は、原理把握が、その対象の外延を一層広く項連関ととって、新たな項連関の発見、それについての知識の獲得としても記述されうる一方、その対象の外延を一層狭く、その項連関を形成する一方の項である中項の方だけととって、その中項の発見としても叙述されうるという2つのア

スペクトを持ち、100 a 15- b 3及びb 4-5は、このうち後者のアスペクトのもとに原理把握の過程を見ていると考えることによって、容易に解消する。

扱て本題にはいろいろ。100 a 15- b 5を読解する際の出発点としてわれわれが立脚するテーゼは次のようなものである——アリストテレースの『分析論後書』は、全体に於いて、探求ではなく伝達のための方法を扱っている。即ち、そこでは、知的生活者が単独で行なう内的過程としての未知の探求でなく、既知の事柄を、教師が生徒に伝える際に、顕在的に遂行される外的過程が問題になっている。

アリストテレース思想自体が弁論術（*ῥητορικὴ*）に根ざすとするヴォルフガング・ヴィーラントの論文⁸⁾や、アリストテレースの議論の仕方には、弁証術（*διαλεκτικὴ*）が極めて深く浸透していることを立証したJ. D. G. エヴァンズの著作⁹⁾以来、弁証術や弁論術の持つ、単に説得や伝達にとどまらず、探求の論理としての面が次第に明らかにせられてきたが、逆に、かつては探求の途とみられていた推論（*συλλογισμός*）や論証（*ἀπόδειξις*）が、実は伝達の論理に他ならぬことを証示したことも、近年の研究成果の一つである。

既にクルト・フォン・フリッツは、アリストテレースの論理学が、個人の真理探求、発見でなく、人間同士のコミュニケーションという問題意識から出発していることを指摘しているが¹⁰⁾、一層詳しくバーンズは、かつては内的探求の論理とみえたアリストテレースの論証が、実は広い意味での説得の手だてであることを証明している。

「論証的学問の理論は、決して学問的探求を嚮導、定式化することを目論んだものではない。それは、既に得られた事実を教えることに専ら関わっている。それは、学者がいかに知識を獲得する、又はすべきであるかを記述するのではない。それは、教師がいかに知識を提示・伝達すべきかという形式的モデルを示すものである。」¹¹⁾

扱て、われわれの解釈は、『分析論後書』の大部分がそれに捧げられているところの主題たる論証のみにとどまらず、その論証の出発点たる原理を把握する過程——『分析論後書』最終章はその論述に充てられているが——も、やはりこの枠組で読み取られるべきである、又は読み取

られうる、というテーゼから出発する。先程のテーゼの定式化に於いて「全体に於いて」と言われていたのはこの理由からである。このテーゼ自体を基礎づける根拠は2つある。

第1の支えは解釈学的公準の一つに求められる。一般に、或る作品や著作の一層多くの部分、位相を統一的に説明しうる解釈の方が、そうでないものよりもすぐれているということを、一つの公準として採用することが許されるならば、『分析論後書』最終章をも、先行する部分との統一性、連続性に於いて捉える方が、そうでない方より、他の諸条件が等しければ、望ましいことになろう。

第2の根拠は、最終章冒頭の言葉のうちにある。先程引用したその部分(99b15-19)から、推論、論証と原理把握とは、同一の場面で相補的に機能するものであることを読み取りうる。然るに、先行する部分で扱われている推論に割り当てられた機能は教育であった。そこからして、最終章で論究される原理把握も教育的機能を持つことになる¹²⁾。

ところで、原理把握の方法、乃至条件は帰納であるから¹³⁾、この結論は、アリストテレスが推論と帰納を並べて置くときには、それらの教育的機能に力点を置いていることによって裏づけられる。

「知性による教授、学習は、全て予在する認識から生ずる。これは全てのものを考察すれば明らかである。なぜなら、数学的諸学はこの仕方では生じてくるし、他の技術の各々もそうである。弁証術的論証についても同様である。推論によるものも、帰納によるものもそうである。つまり、両者は予め知られていることを介して教授を行なう。一方は、相手が理解しているものとしてそれを前提にとり、他方は、個別、特殊が明白であることを介して普遍、一般を証明する。弁証術的論証も又、同じ仕方では説明する。なぜなら、帰納である例によるか、推論であるエンテュメーマによるか、いずれかであるから。」(71a1-11 下線筆者)

「扱て、『分析論』に於いても述べられているように、全ての教授は、予め知られていることから出発する。なぜなら、或る場合には帰納を介し、或る場合には推論によるからである。」(1139b26-28 下線筆者)

帰納が推論と並ぶ弁証法の方法の一つであるとする『トピカ』の一節(105 a 10-19)をもここに付け加えてよからう¹⁴⁾。

このように教育が目的であることから、一つの特徴が原理把握によって帰結する。それは、原理把握は無時間的直観によって一気に行なわれるのではなく、何段階かを経て、従って相当の時間をかけて行なわれるということである。その範例は『分析論後書』第1巻第24章に見いだされる。

「更に又、生成するものであれ、存在するものであれ、何か他のものが理由であることがありえないときまでわれわれは理由を探求し、そのときに知っているとなればわれわれは考える。なぜなら、最後のものは既にこのようにして目的であり、限界であるから。例えば、何の為に彼は来たか。金を得る為である。然るにそれは、借りていたものを返す為である。然るにそれは、不正を犯さぬ為である。このように進んでいって、もはや他のものの故でも、他のものの為でもないとき、目的としてのその故に来た、存在する、生成する、となればわれわれは言う。そしてそのとき、何故彼が来たかという理由を最も知っている、と言う。」(85 b 27-35)

この引用箇所には、最下の中項〈金を得ること〉に始まり、順次〈借りていたものを返すこと〉、〈不正を犯さぬこと〉(そして更に、書かれてはいないものを補えば、〈正義に即した活動〉、〈徳に即した活動〉)という中項を析出することによって、倫理学の原理〈徳に即した活動が最高善である〉に達する過程が描かれている。順次、段階を踏んで進行するという、原理把握のもつこの特質に対する概括的表現として、ここでは、「段階性」という名称を採用しておく。

この段階性は、教育という目的を前提に据えるとき、最もよく説明されうる。物事の探求、発見の為ならば、原理に含まれる中項を除く全ての中項のうちのいくつか、若しくは全てを飛越して、一気に原理を掴んでも一向にかまわない。これに対し、教授、教育の場合には、一步一步進む方が容易、且つ確実である。今問題にしている部分(100 a 15-b 5)、特にそのうちでも a 15-b 3で描かれているのは、まさしくこの段階性に他ならない。

「つまり、差別を持たぬもののうちの一つが停留すると、最初の普遍が魂に生じる〔……〕。それらに於いて再び停止が生じ、分けられないものと普遍とがついにはとまるであろう。例えば『このような動物』が生じ、ついには『動物』が生じる。そしてこの『動物』に於いても同様である。」(100 a 15- b 3)

従って、ここで説明されているのは、いかにして一人で原理を探索するかではなく、既に自分が把持している原理を、いかに他者に気づかせるか、の方法である¹⁵⁾。

この段階性から、帰納にとって一つの系が導出される。それは、各段階の普遍の把握ひとつひとつに於いて、一回ずつ帰納が行なわれるということである。レッシャーは同様のことを について述べ、は第一原理だけでなく、あらゆるレベルの普遍把握に関わり¹⁶⁾、従って原理把握と普遍把握とは、類比の関係にあるのではなく、前者は後者の一種であるという関係にあるとしているが¹⁷⁾、われわれは、それを帰納についても主張したい。

帰納の出発点は καθ' ἕκαστα であるが¹⁸⁾、 καθ' ἕκαστα は個別のみならず特殊¹⁹⁾も含む²⁰⁾。従って帰納は、特殊から一般への移行をも条件づけうる。一例を挙げよう。『分析論前書』第2巻第23章に於いて、人も馬も驃馬も長生きであること、及び、人も馬も驃馬も胆汁を持たぬことから、胆汁を持たぬ動物は全て長生きであることを証明する場合が帰納法の例として挙げられているが、ここで人、馬、驃馬は個別ではなく特殊である²¹⁾。従って帰納は、最高位をも含めていずれの段階の普遍に対しても施される操作であるといえる²²⁾。こう考えれば、100 b 3-5の論理をすっきりと通すことが可能になる。つまりその部分は「感覚はそのように（即ち、一回ごとに普遍性を上げていくという形で漸進的に各段階の）²³⁾普遍を導き入れるから、（一回ごとに普遍性を上げていく操作が要る。然るに、個別から普遍への移行、及び特殊から一般への移行を条件づける操作は、いずれも帰納であった。従って、普遍性の段階の漸次的上昇の終局点に於いて把握される）原理は、帰納（の積み重ね）で知るしかない」とパラフレーズされうる²⁴⁾。

ところで原理把握の持つ、段階性という特質自体は比喩に於いても語られている。

「丁度、戦闘に於いて敗走が生じたとき、一人がとまると、もう一人がとまり、次いで又もう一人がとまり、こうして始まりにまで至るようなものである。」(100 a 12-13)

もとより、二つのものが一つの内包、乃至規定、乃至徴表を共有するということは、必ずしも両者の同一性を保証するわけではない。しかし両者間の共通性は単に一つの徴表にとどまらない。100 a 15- b 3に於いて記述されている原理把握と、比喩に於いて記述されている事象との間には更なる共通点がある。それを内容と形式の両面に亘って見ていこう。

先ず、内容の側についてであるが、比喩に於いては、第1の戦士が踏み止まり、次いで第2、第3のそれが踏み止まり、その結果遂に ἀρχήに至るとされている。つまりそこでは、或る過程について4つの段階が区別されている。他方、100 a 15- b 3に於ける原理把握の過程についての説明によれば、第一段階の普遍（「差別を持たぬもののうちの一つ」²⁵⁾及び「最初の普遍」と呼ばれているもの）の説明のあとに、感覚が潜在的に含む普遍として〈人間〉が出ているから、第一段階を〈人間〉と考えてよいとすると、そのあとの例示(100 a 2-3)からして第二段階は〈このような動物〉、第三段階は〈動物〉、第四段階は最高類としての範疇（ここでは〈実体〉）であるから、やはり四段階が区別されていることになる。

形式の側の類似点に移ろう。第1の類似点は ἰστημι の語に存する。原理把握の説明部分(100 a 15- b 5)に於いて3つの用例(100 a 15 στάντος, 100 b 2 ἰστάται, 同 στή)を数える ἰστημι の語は、比喩の中でも στάντος, ἔσθη と2つの用例を数えることができる。

先ず、『分析論後書』以外で、ἰστημι の語の類縁の用例を求めるならば、16 b 20-21, 247 b 11-12, 917 b 28-31, 956 b 39-40が挙げられよう。自動詞（思考等が〈静止する〉）、他動詞（思考等を〈静止させる〉）の違いこそあれ、いずれに於いても、精神が静止することによって、それに相関する対象の側でも、或るものがそれとして固定、同定される、という事態が表わされている。これらはいずれも主体の側での動作、状態を表わす用例であるが、100 a 15- b 3の3用例は、同一の動作、状態、それに対応する客体の側を主語として表わすものと考えられる。つまり、或るものがそれとして感覚や思惟によって固定されたり、同定されたりすることを「或るものが停留する、とまる、静止する」と言い表わ

している²⁶⁾。ところで、『分析論後書』以外の用例では、感覚による対象の固定も考えられており²⁷⁾、その場合の対象は個別であろうが、100 a 15-b 3にある3用例に於いては、明らかに感覚でなく思惟による普遍の確保の意味に於いて用いられている²⁸⁾。従って、比喩内部の用例もその意味においてとる方が自然である。特に比喩に於ける「一人がとまると」(ἐνὸς στάντος) という Genitive Absolute が、原理把握の説明部分に於いても「一つが停留すると」(στάντος … ἐνός) と、素材も文法上の形式も殆ど同じまま反復されている点に注目すべきである。

形式上の第2の類似点は ἕως の語である。比喩に於いても、原理把握の説明に於いても、そこで問題になっている過程の到達点、終局点を導入する為にこの語が置かれている。

以上、100 a 15-b 5と比喩との間に、内容、形式両面に亘る顕著な共通性が認められることから、両者に於ける指示対象が同一であるという命題を、われわれはかなりの蓋然性をもつものと認定しうる。然るに100 a 15-b 6に於いて語られているのは原理把握についてであるから、比喩が意味しているものもそれであることになる。

以上は、両箇所て扱われている対象にいくつかの共通徴表が認められることから、両対象が同一であるという命題を基礎づけようとするものであるが、両箇所を繋ぐ部分(100 a 14-15)も同じ方向を指し示している。その部分の眼となる語は πάλαι であるが、その語が何を指すかについては、解釈は必ずしも一様ではない。先ず、この語自体の意味については、ワイツは「少し前に」ととり、ロス、トレデニク、加藤信朗、バーンズ、ザイドルは「たった今」ととる。次に、具体的にどの箇所を指すかについてであるが、先ずワイツは97 b 7-25を指すとする。しかしその箇所を指すすると、100 a 15の οὐ σαφῶς δὲ ἐλέχθη (「明瞭には語られていなかった」) に抵触する。なぜなら、そこでは定義の獲得の仕方が、極めて明瞭に語られているからである。他方、ロス(p.677)、加藤信朗は100 a 6-7にかけろ。しかしその παντὸς ἡρεμήσαντος τοῦ καθόλου (「安らぐ普遍全体」) という語句を、普遍の各段階の漸次的析出とその終局としての原理把握との一層不明瞭な説明ととることは困難である。少し広く a 3-9にかけろトレデニク(p.259)の説も、同じ理由で斥けられるべきであろう。そうすると残る候補は比喩そのものである。

こう解するときのみ、οὐ σαφῶς δὲ ἐλέχθη と語られたことの意味

をひとは汲み尽くしうるのではなかろうか。一般に、比喩の本性の一半は σαφήνεια を離れる傾向を持つ²⁹⁾。ここでも比喩はあまり明瞭ではない。なぜなら、原理把握についての説明にある ἐν … ἴσται (「…に於いて停止が生ずる」100 b 1-2 cf. 3 下線筆者) という言い回しは、個別に於ける普遍の、又は特殊に於ける一般の内在を前提するが、比喩に於いては「一人がとまると、もう一人がとまり、次いで又もう一人がとまり、……」と語られているのであるから、一人一人の兵士の相互関係は並列 (Nebeneinander) 乃至相互外在 (Außereinander) であるからである。

又、比喩内部の水準に於いては、ἀρχὴν と読むにせよ、読まぬにせよ、又、ἀρχή を〈元の秩序〉ととるにせよ、とらぬにせよ、事柄としては、回復される秩序はかつてあった秩序と同じものであるが、後の部分で語られている原理把握に於いては、原理は、原理把握に先立っては いまだ把握されたことのないものである、という違いがある³⁰⁾。

こう考えるならば、比喩の趣意と原理把握の過程との間には、οὐ σαφῶς と語るに適した程度の同一性と差異性が共存していることになる。従って、πάλαι は比喩を指すと解するのが順当である。然るに、100 a 14-15にある ὁ δ' ἐλέχθη μὲν πάλαι, οὐ σαφῶς δὲ ἐλέχθη, πάλιν εἰπωμεν (「今語られたことは、明瞭には語られていなかったのも、もう一度述べよう」) という文は、その前後で語られていることが、実質的、基本的には同一の事柄であることを示している。従って、敗走の比喩も、各段階の普遍の継起的明瞭化を経由した原理把握を説明しようとするものであると解するのが穏当であろう。

III

最後の論証は、比喩を含む文のうち、比喩以外の部分 (100 a 10-11, οὔτε δὴ ἐνυπάρχουσιν ἀφωρισμένοι αἱ ἔξεις, οὐτ' ἀπ' ἄλλων ἔξεων γίνονται γνωστικωτέρων, ἀλλ' ἀπὸ αἰσθήσεως) からのものである。それは、マックス・ブラックの用語を借りれば、フレームに相当する部分である³¹⁾。この中にある ἀφωρισμένοι αἱ ἔξεις (「限定された持前」) という言葉は、任意の段階の普遍ではなく、原理を知っている状態を指す。その2つの論拠を次に挙げる。

第一に、最終章の先行する部分に於ける99 b 18の εἰς, 25の εἰς, 32の εἰςは、いずれも ἀρχήの知識を指す。従って、これらの形成する統一的意味関連の余韻いまださめざるところに εἰςの語が用いられているならば、そこでも原理を知っている状態を意味すると解するのが自然であろう。

第二の論拠は、それに「ものを一層よく知っている別の持前から生ずるのでもない」ということが述語されていることのうちに見いだされる。今もしそれが原理を知っている状態以外のものであるならば、それは原理から論証や推論によって導き出されうる³²⁾。然るに、原理を知っている状態は、結論を知っている状態よりも、一層多く、一層よく知に与っている³³⁾。換言すれば、原理は結論より一層多く、一層よく知られている³⁴⁾。従って、原理を知っている状態以外のものであるならば、それは一層多く、一層よく知っている別の状態から生ずるものであることになる。然るに、「ものを一層よく知っている別の持前から生ずるものでもない」とされている。

以上の2つの論拠からして、ἀπορριπμέναι αἱ εἰςは、原理を知っている状態でしかありえないことになる。然るに比喩は、この部分(100 a 10-11)で言及された対象を、更に一層細かく規定(präzisieren, differenzieren)するものとして出されている。従って比喩の趣意は原理把握であるということになる。

われわれは、『分析論後書』100 a 12-13にある敗走の比喩が、従来そうとられている如く、単一の個別がいくつか反復されることにより普遍が把握される過程を説明するものではなく、より特殊なものから、より一般的なものへ一つずつ段階を踏むことによって、遂には無中項の命題へ到達する原理把握の過程を説明するものであることを、大きく分けて3つの論証を用いて証明しようとしてきた。もとより、これらの論証が従前の見解を斥けるに足るだけの力を持っていると主張するつもりはない。ただ従前の解釈が必ずしも自明なものではないことを示しえたとすれば、それで本論文の目的は達せられたことになる。

註

1) Cf. Themistius, f. 14b; Tredennick, p.258; Hamlyn, p.177 f.; Seidl 1984,

p.313.

- 2) Cf. Leshner, p.61.
- 3) Cf. Hamlyn, p.179: "Repetition by itself seems however an empty explanation".
- 4) 諸技術の段階は普遍のそれと類比的である。1094 a 9-16参照。そこでの ἀρχήの語と ἀρχιτεκτονικόςの語の類縁性に注目すべし。
- 5) Cf. Matsuo 1984.
- 6) 〈戦陣が崩れる以前の秩序〉と解するのは, Themistius (f. 14b), Seidl 1971 (p.82), Seidl 1984 (p. 313), 〈最初に逃亡した者〉ととるのは Ross (p. 677), Tredennick (p. 258), 加藤信朗 (p. 770) である。尚, Barnes 1975 (p. 81) は, ἀρχήνの代わりに ἀλκήνと読んでいる。
- 7) Cf. Ross, p. 675; Tredennick, p. 245f.; Seidl 1971, p. 83; Barnes 1975, p. 253f..
- 8) Wieland 1958.
- 9) Evans. 尚, 松尾大(特に pp. 80-82及び註47-66) 参照。
- 10) Fritz, p. 28.
- 11) Barnes 1969, p. 138.
- 12) Hamlyn (p. 183) によれば, 原理把握は, 自分一人でするよりは, むしろ他者によってさせられる営みである。
- 13) Cf. 100 b 3-4.
- 14) Cf. Owen, p. 87.
- 15) Oehler (p. 168) は, 『分析論後書』の最終章では教師と生徒の間の問答で使われる帰納が説明されていると言う。
- 16) Leshner, p. 68.
- 17) Ibid., p. 62.
- 18) 13 b 36, 68 b 20, 28, 71 a 8-9, 92 a 37-38, 105 a 13-14, 108 b 10-11, 156 b 15-16, 1048 a 35-36. cf. 81 b 1, 97 b 29, 1143 b 4-5.
- 19) ここでは「特殊」は, 類としての〈一般〉に対する種の意味に於いて用いる。両者はともに普遍として「個別」に対する。Cf. R. M. Hare, "Universalisability", *PAS* 55 (1955), p. 301.
- 20) Cf. 97 b 28-37, 105 a 14-16, 1141 b 14-21 ; Barnes 1975, p. 91 (71 a 5).
- 21) Cf. Heß, p. 59.

- 22) これに対する異説としては Seidl 1971 (p. 83) がある。彼は「普遍」(Allgemeines) 形成の2段階として、「普遍概念」(Allgemeinbegriff) の形成と「原理認識」(Prinzipienerkenntnis) とを区別し、前者は帰納によらず、後者のみが帰納によると言う。
- 23) 100 b 5 の οὐτω を大部分の者は直前の ἐπαγωγῇ にかけるが (z. B. Leshner, p. 60 ; Engberg-Pedersen, p. 317), Hamlyn (p. 171 f., p. 180 f.) は、所謂 genetic account にかけている。かける箇所に関してはわれわれは Hamlyn と見解を共にするが、当該箇所の解釈は異なる。
- 24) Barnes 1975 の解釈 (p. 256) は、帰納を、最下の普遍の把握と下位の普遍から上位の普遍への移行との両者に於いて働くものとする限りで、われわれの解釈と一致するが、100 b 5 で τὸ καθόλου を最下の普遍のみに限定する点、及び100 b 5 の οὕτω を前行の ἐπαγωγῇ にかける点で、われわれの解釈とは異なる。
- 25) 100 a 15-16 の τῶν ἀδιαφόρων ἐνός は、トレデニク、加藤信朗の如く〈個別〉をとる者、ハムリン (p. 179) の如く〈差異化以前の混沌たるもの〉の意に解する向きもあるが、ピロポノス、ロス、レッシャー (p. 61), バーンズ、ザイドルら多数の説に従い、〈最下の種〉をとる。
- 26) 尚、この停止の結果が ἡγεμία である (cf. 100 a 6, 407 a 32-33 : Berti, p. 153)。
- 27) Cf. 956 b 39-957 a 3.
- 28) 註 25) 参照。
- 29) メタファーに必要な、或る程度の分かりにくさ、喩えと喩えられるものとの間の一定の懸隔に言及した箇所としては、1406 b 8-9, 1410 b 20-26, 1412 a 11-13 がある。
- 30) Cf. Hamlyn, p. 178.
- 31) Cf. Black, Max, "Metaphor", *PAS* 55 (1954-55), p. 28.
- 32) Cf. 72 a 30-32, 1098 b 8.
- 33) Cf. 72 a 28-32, 36-37, 38-39, 85 b 34-35, 37, 99 b 27.
- 34) Cf. 71 b 21-22, 29-30, 72 b 26-27, 1139 b 34-35.

テキスト

strvxit W. D. Ross. Praefatione et Appendice Avxit L. Minio-Paluello, Oxonii 1964.

Aristotelis Ethica Nicomachea. Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instruxit I. Bywater, Oxonii 1894 (1970).

参考文献

- Anton, J. P. / Preus, A. (edd.), *Essays in Ancient Greek Philosophy*. Vol. II. State University of New York Press 1983.
- Barnes, J., "Aristotle's Theory of Demonstration", *Phronesis* 14 (1969), 123-153
= Barnes / Schofield / Sorabji, 65-87.
- ..., *Aristotle's Posterior Analytics*. Tr. with Notes. (Clarendon Aristotle Series) Oxford 1975.
- Barnes, J. / Schofield, M. / Sorabji, R. (edd.), *Articles on Aristotle*. I: Science. London 1975.
- Berti, E., "The Intellection of 'Indivisibles' according to Aristotle", in: Lloyd, G. E. R. / Owen, G. E. L. (edd.), 141-163.
- Engberg-Pedersen, T., "More on Aristotelian Epagoge", *Phronesis* 24 (1979), 301-319.
- Evans, J. D. G., *Aristotle's Concept of Dialectic*. Cambridge 1977.
- Hamlyn, D. W., "Aristotelian Epagoge", *Phronesis* 21 (1976), 167-184.
- Heß, W., "Erfahrung und Intuition bei Aristoteles", *Phronesis* 15 (1970), 48-82.
- Fritz, Kurt von, "Die epagoge bei Aristoteles", *Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Philosophisch-historische Klasse. Jahrgang 1964 Heft 3. 1-64.
- Lee, H. D. P., "Geometrical Method and Aristotle's Account of First Principles", *Classical Philology* 29 (1935), 113-124.
- Leshner, J. H., "The Meaning of Ν Ο Τ Σ in the Posterior Analytics", *Phronesis* 18 (1973), 44-68.
- Lloyd, G. E. R. / Owen, G. E. L. (edd.), *Aristotle on Mind and the Senses*. (Proceedings of the 7th Symposium Aristotelicum) Cambridge 1978.
- Matsuo, H., "Arche (starting-point) of Ethics in Aristotle's *Nicomachean Ethics*", *Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae* (edited by Tomonobu Imamichi). 617 (46)

- 2 (1984), 35-43.
- … “Aristotle on Dialectic”, *Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae* 3 (1985), 47-53.
- Oehler, K., *Die Lehre vom noetischen und dianoetischen Denken bei Platon und Aristoteles*. (Zetemata Heft 29) München 1962. 2., mit einem neuen Vorwort vers. Aufl. 1985.
- Owens, J., “The Universality of the Sensible in the Aristotelian Noetic”, in: Anton, J.P. / Preus, A. (edd.), 462-477.
- Ross, W. D., *Aristotle's Prior and Posterior Analytics. A revised text with introd. and commentary*. Oxford 1949.
- Rolfes, E., *Lehre vom Beweis oder Zweite Analytik (Organon IV)*. Übersetzt und mit Einleitungen sowie erklärenden Anmerkungen. (Ph B 11) 1922 (Nachdruck 1976)
- Seidl, H., *Der Begriff des Intellekts (νοῦς) bei Aristoteles im philosophischen Zusammenhang seiner Hauptschriften*. (Monographien zur philos. Forsch. Bd. 80) Meisenheim am Glan 1971.
- ……, *Zweite Analytiken. Mit Einleitung, Übersetzung und Kommentar*. (Elementa-Texte. Bd. 1) Würzburg / Amsterdam 1984.
- Tredennick, H., *Posterior Analytics*. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. / London 1960 (1966).
- Tricot, J., *Organon, IV. Les seconds analytiques. Traduction nouvelle et notes*. Paris 1962 (1979).
- Wieland, W., “Aristoteles als Rhetoriker und die exoterischen Schriften”, *Hermes* 86 (1958), 323-346.
- ……, “Das Problem der Prinzipienforschung und die aristotelische Physik”, *Kant-Studien* 52 (1960-1961), 206-219.
- ……, *Die aristotelische Physik*. Göttingen 1962. 2. durchges. Aufl. 1970.
- 加藤信朗 「分析論後書」訳註 『アリストテレス全集 1』 岩波書店 1971 (1976)
- 松尾 大 「キケローに於ける共通トボスの概念」 今道友信編 『美学史研究叢書』東京大学文学部美学藝術学研究室 第五輯 1979 pp. 75-104.